二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

小説 狩野　景
挿絵 ねみぎつかさ

第一章　学生寮に執事とメイド!!　006
第二章　可愛いメイドは同級生!?　052
第三章　御主人さまの憂鬱　093
第四章　仲直り大作戦っ!?　127
第五章　ご奉仕します、御主人さまっ!!　171

登場人物紹介

Characters

綾瀬川 晶（あやせがわ あきら）

まだ若くして、龍堂寺家の財産を管理・経営する執事。メイドたちを束ね、祐介をサポートする。

神無月佐奈（かみなづき さな）

龍堂寺家の先代当主、剛刹のボディーガードを務めていた少女メイド。武芸全般に長け、剛刹に忠誠を誓っている。

遠風 揺羽（とおなぎ ゆらは）

医学の心得のある看護メイド。祐介の健康状態を管理し、心身の世話をするが、享楽的な性格の持ち主。

李 美蓮（りめいりゃん）

龍堂寺家の厨房を取り仕切るチャイナドレス娘の料理人。元気で活発な少女。

小山内 祐介（おさない ゆうすけ）

草薙学園の一年生。両親を亡くすも、富豪・龍堂寺剛刹の孫ということが判明。その遺産を受け継ぐことに。

第四章『仲直り大作戦っ!?』より

祐介が起き上がり後ろから抱きついてきた。
「ひあっ！　だ、だめっ!!」
かなり熟睡していたため、完全に寝ぼけている。もしかすると佐奈に弄られた気持ちよさで淫靡な夢を見て、その続きと思っているのかもしれない。
腰を突き出されて根本まで挿入されてしまう前に、ツインテール少女は尻を捩って強引にペニスをヴァギナから追い出した。蕩けるような快感美が失せて、膣穴が抗議するかのように疼き出すが仕方がない。
このようなはしたない行いに及んだことを、彼に知られるのは避けたかった。早々に逃げ出そうと這い進んでベッドから降りようとしたが、半眠りの少年はしつこく迫る。
「ふぁん、ゆらはしゃん……」
夜伽を受け持つメイドと間違え、甘えた声を出して逃すまいとしがみついてくる。
「ち、ちがう、わたしは、ゆ、揺羽では、ないっ！　あっ、こ、こらぁ～」
華奢な身体で寝ぼけている癖に祐介の腕力は意外と強かった。普段の非力は、もしかしたら彼の気弱が無意識に力を抑さえ込んでしまっているのかもしれない。
快楽に蕩けた身体が脱力してしまい、彼女のほうはいつもの力が発揮できない。その状態から立ち直ることを許さず、祐介は背中に密着しながら背後から回した手でメイド服の上から乳房を揉みまさぐってくる。

「あっ、はあうっ！　やぁあっ、む、胸、そんな揉む、なぁああっ!!」
半ばまで房肉に食い込まされた指が掻き混ぜるように蠢かされ、くすぐったいような快感が浮き上がってきてしまう。巨房を大胆に上下させ、上向きな魅惑の形状を拉げる大胆な揉み捏ねに、切なく媚びるような喘ぎが声に混じる。
揺羽の指導の賜物だろうか、少年の指使いは巨乳の扱いに長け、胸の芯から切ない悦波が押し寄せてしまう。
焦らすように軽く転がしたかと思うと刺激を止められ、そのまま少し放置される。
「くうっ、ん……ぁあ、や……」
物足りなさを十分に煽った頃に指先で乳首を強く弾かれ、頂上から電気が炸裂した。
「ひゃあうううっ!!　んんうっ、ふうあああぁっ！」
息が詰まる激悦に背筋を反らせ、くたくたと上体をシーツの上に崩れさせてしまう。
（む、胸だけ……で、だめぇ、に、逃げられ、ないぃ……）
図らずも脚は膝立ちのままで、発情して交尾を強請る牝猫のように尻を突き上げた体勢になってしまう。虚ろな瞳に瞼を半分閉じた寝ぼけ顔で、少年が女肌の柔らかさに甘えてくる。コルセットで細く絞った腰に回した腕で強く抱きしめられ、充実感に熱い吐息を漏らして身震いしてしまう。そのままのしかかってくる祐介の、本気汁にまみれた怒張が濡れほぐれた尻房の狭間にぬるりと潜り込んできた。

「――くひっ！　いはぁあっ!!　ち、ちがっ、はあわあっ、そ、それ、穴ぁ、違うほうっ！」
シーツを鷲掴みに匍匐前進で逃れようとしても、祐介の重さに動けない。
尻穴を強く圧迫されただけで四肢から力が抜け出て、無力にされてしまう。
若々しい勢いに満ちあふれた祐介の剛直は勃起の角度が急で、後ろから挿入しようとすると、アナルに狙いが定まってしまうらしい。美蓮のときと同様に、佐奈も鳶色に薄く色づいた菊皺を、先端を尖らせた硬竿に抉られてしまった。
――ヌリィッ！　ブズッ!!　ヌズッ、ヌズズッ！　ズブズブズズブッ!!　ズムンッ！
「あ、あああっ、おし、おしりぃっ!!　はいっちゃ、はいっちゃううっ！　だめっ、だぁあああぁ、めぇはわあああぁあああぁあっ!!」
大量の愛液とカウパーが潤滑をもたらし、初めてだというのに痛みはなかった。ただ狭い後ろ穴を拡張される虚脱感に、どこまでも落ちてゆくような心許なさが込み上げる。
（んはぐぅっ、な、なにこれぇ！　お尻なんかにっ!!　……こんな、汚いとこぉ！）
排便感に似ているが、もっともどかしく落ち着きのない感触に尻の内側を満たされ、泣き出す寸前のような情けない表情を浮かべてしまう。
直腸をみっちりと満たした怒張が深いところで脈を打ち、窮屈な腹部に響かせた。
手荒な手段を使えば無理矢理逃れることもできるが、今日だけでもう二度も彼に乱暴を

働いてしまっている。気に食わない相手とはいえ、流石にやりすぎたと内心思っていたため、躊躇ってしまう。それに、できれば彼を完全に目覚めさせたくなかった。

（こんな……、お、尻に、入れ、られてるの、知られたら……くっ、それは、いやっ!!）

なぜこのような状況に至ったのかも、彼女の口から説明しなくてはならなくなる。その事態を避けるためにも祐介を寝ぼけさせたままで、これもすべて夢と思わせておきたい。

だが他に打開策もなく、ただうろたえているうちに、少年は佐奈のコルセットに絞られた細い腰に手を添えて、後ろから抉り込むようなストロークを繰り出し始めた。

「かひぁああっ！　だ、だめっ!!　や、う、ううごくなぁあっ！　あふっ、あ、ああ、ひゃふぁはぁああぁっ!!　はぁ――――あ、ぁああ、あっ！」

目一杯に口を開いて蠢く菊襞が捲り返され、極太の肉竿が出入りする。びじゅ、むじゅぶっ、と、粘液が泡立って飛沫を散らし、内腿をべっとりと濡らす。

夢心地のため勢いはない。しかしゆっくりながら念入りに繰り出される抽送は、細かい刺激の一つ一つを直腸に刻み込み、焼けるような熱を腹腔に生み出す。

「へはぁあ、う、うそぉ、そん、なっ！　ぁ、だ、だめぇえぇっ!!」

剛刹に拾われたため他所での奉仕経験はなく、その主の性癖は正常位での膣挿入を善しとしていたため、佐奈の性技は四人の同僚のうちで最も拙かった。

当然、アナルセックスも知識として知るだけで経験がない。そのうえ、主人譲りの生真

面目さ故に、排泄器官を用いるという行為が倫理面での嫌悪を抱かせていた。少年に根本まで挿入された瞬間も困惑しか感じず、いかにこの状況から逃れるかしか頭になかった。

それなのにヴァギナとは異質である、敏感な粘膜部分を硬く太い肉の棒に刮げられる感触に、佐奈の肉体が魅力を感じてしまっている。加えて、祐介の怒張を迎えかけて昂ぶったヴァギナの欲求が、満たされぬままに悶々と膨らみ続けていた。

（う、そ……？　こん、な……あ、はわぁ、あああぁっ！）

深々と突き込まれ腸壁を刮げられる感触に快感を得てしまう。

信じられず否定しようと思うのだが、肉体は素直な反応を示す。ズンと腸奥を突き上げられると壁襞が一気に収縮し、怒張を締めつけて離そうとしなくなる。

菊穴は忙しなく開閉を繰り返し、ストロークのリズムに合わせてより深くへ極太を取り込もうと働いていた。

「す、ごい、締めつけてくるよ……揺羽、さん……。はぁ、いいっ!!」

佐奈の身体の反応は夢心地の少年を喜ばせ、やめさせるどころか余計に魅了してしまう。

「違う……わた、し……ゆらは、ないの……に……ぃっ！」

自分から招いた状況とはいえ、軽蔑を感じている、しかも貧弱な少年に尻を犯される屈辱が胸を満たす。脱力で思うままに抵抗できぬ無様に歯噛みするが、その悔しさの中に彼から揺羽に間違われてしまっている残念さが入り交じって佐奈をますます困惑させる。

（くっ……わたしと、……してるとは、少しも思わぬのか!?　失礼な、卑劣漢めっ!!　――って！　わたしは、なにを？　ばかなっ、こ、これは、違うからぁっ……）

一瞬そのようなことを思ってしまい慌てて自分で否定するが、意識した途端、尻穴を満たす灼熱の違和感が甘酸っぱい痛痒さとなって、内臓に染み渡ってしまう。

それでも理性は頑固に、次第に濃厚さを増してくる快楽を退けようと必死になる。だが甘美の味わい方を知ってしまった尻穴は、ますます貪欲に快楽を求めて腸襞を脈動させた。

「はっ、あ、根本、までギュッて!!　んうっ、締めつけいいっ！　もう、ぼくっ!!」

高まる歓喜に、祐介の口調が鮮明さを増してくる。同時におぼつかぬストロークも激しく速く、叩きつけるようなものへと変わってきた。

「うわうっ！　やめへぇうっ!!　そ、そん、そんなっ！　ああ、つ、つよ、つよ強すぎぃいいっ!!　お尻きちゃうっ！　お尻へんなのっ!!　ひゃうっ、ひゃあ、ひぁあああっ！」

内臓が下から突き潰されるような危機感に声を震わせ、蜜汗の滲んだ顔を振りたくる。

大胆に捩れる身体に、フリルで縁取られたメイド服があられもなくはだけて、襟刳りの深い胸元から巨房が下着からも溢れ出し、薄紅色の乳輪をレース地に透けさせる。

服の裏地への乳首の擦れに腸襞の締めつけが威力を増すと、祐介の高まる喘ぎを伴って怒張がますます脈震えを激しくし、いきなりの膨張で直径を増してしまう。

「ひゃわうっ！　いひぁあ、はあん……っふううっ!!」

尾骨から焼けるような喜悦が跳ね上がって、腰にガクガクと震えが走った。
快感を後ろ穴に奪われ花弁を悩ましく震わせるヴァギナが、悔しそうに愛液をトロトロと垂れ零す。その濃密汁がじっとりと染み込んだ黒いスカートは、激感に飛びそうになる理性を押し止めようと気張る佐奈の両手に握られ、アナルが抉られるたび、ぐちゃぐちゃに絞り毟られて、陰唇をひくつかせる女陰から極太を押し込まれた尻穴をさらけ出している。
膣で得られるような脳裏を弾けさせる激感と異なって、アナルの気持ちよさは佐奈の理性を保たせたままで肉体を容赦なく狂わせる。
「ああっ！　変っ!!　変っ！　変なのぉおっ!!　なにかっ、く、くるっ！　きちゃうっ!!」
子宮壺と内臓が連動して、大きなうねりを生み出していた。
ぶじゅっ！　ずっぷちゅ!!　ぶずずぶっ！　ぐぶんっ!!
佐奈の尻を抉り返すようなストロークはますますえげつない汁音を響かせて、鍛え上げられた身体を突っ伏させるほど激しく繰り出される。
ごんごんごんっ、とS字結腸が拉げ、引き締まった腹が波打って震える。
肉体が精神の制御を離れ、下腹の奥から弾けた欲求に従った。絶頂感と排泄感の入り交じった重々しい快感の爆裂に全身が揺さぶられる。前後の穴を濃厚な濁熱が駆け抜けた。
「きひぃいいいいっ！　やぁあっ!!　あ、あああっ！　も、もうっ、も、だめぇええっ!!

はわっ、はふぁわぁあああっ！　あひゃぁあああああっ!!」
「ぼ、ぼくも、ああうっ!!　で、出るっ！」
――ぷじゅっ！　ぷじょじょっ!!　ぷばしゃぁ――――っ！　びちびちゃびちゃっ!!
どぴゅる！　どどびゅ、ぴゅるるっ!!　びちゅ、どぴゅどぴゅどぴゅる――――ッ！
深く突き込まれた怒張から勢いよく精液が噴射され、強すぎる汁圧で腸底を叩いた。痛いほどの勢いと焼ける熱さを感じ、佐奈の理性が弾ける。
悩ましい嬌声を伴奏に夥しいヴァギナ潮が、失禁のようにだらだらと垂れ落ちた。
狭い腸内を満たした牡濁は染み溢れた腸襞液と入り交じって、菊皺から噴き出し膣汁を混濁する。腐りかけの果実を思わせる甘酸っぱく饐えた退廃の淫臭をむんむんと振りまく、その液溜まりにアナルで結合したまま、佐奈と祐介はぐしゃりと折り重なって崩れた。
全力を振り絞った荒い息がいつまでも続き、呼吸に上下する胸以外、指一本たりとも動かせぬ。その状態がしばらく続き、ようやく落ち着きを見せたとき、少女の背中に顔を埋める少年がようやく完全に目を覚ました。
「え……あれ……？　夢……じゃない。えと、ここ、僕の部屋、だよね」
キョロキョロと周りを見回し、いままでのことが淫らな夢ではなかったことを理解する。現実と知って、改めて身体の下の柔らかい肌に気づき、ギョッとして身を起こしかけた。
「えと、あの、揺羽さん……。　え……？　えぇえええっ!?　う、うそ、なんでっ!!」

第五章『ご奉仕します、御主人さまっ!!』より

咲き乱れた栗の花の脱力的な香りに朦朧となって、晶はこぼれ落ちる白濁汁を勿体なさそうに掬い上げて口元に運んでいた。じゅるじゅると淫靡に音を鳴らし啜り込んでは、その味わいに目元を蕩けさせ、ぐびりと飲み下す。

「わたくしはたっぷりいただきましたのでぇ、つ、次は佐奈にあげてくださいませ……」

精液まみれで床にぺったりと足を崩してへたり込み、少女執事が傍らを指し示す。

その狂おしく淫靡な仕草に剛直は射精直後だというのに少しも勃起を損なわずにいる。

彼女に肉棒をくわえられている最中にも、視線を外せずにいた寝台での睦み合い。

いまや揺羽は佐奈に馬乗りとなって、自分の乳房を彼女の胸に擦りつけている。双方並外れて大きな肉房が押し合って、重なり合った部分からむっちりと拉げていた。

「ふにゅ〜〜んっ！　ふぁあうんっ、おっぱい、いいのぉっ!!　あっ、佐奈の、に、こりん、ってされちゃったぁ、はあああぁっ！」

「だめっ、頭、飛んじゃう、から……もう……んうっ、あっ、あ、あ、あ、ううぁっ!!」

硬く勃ち強張った乳首と乳首をくっつけて、身体を揺らしグリグリと擦りあわせるたびに、揺羽も佐奈も断続的な痙攣に身を捩らせて甘い香りの淫汗をじっとり滲ませる。

そして美蓮はあられもなく開帳された護衛メイドの股間へと鼻面を潜り込ませ、愛液を渾々と湧きこぼす牝秘部を舐め啜っていた。

「さなのお汁……、どんどん濃くなっへくるひょ……。匂い……果実酒みたいネ……。頭

くらくらひて、気持ちいい……」
「そん……な……だって、あなたたちが……」
恨めしそうに呟かれても、揺羽は勿論のこと美蓮もお構いなしで佐奈の肉体を弄ぶ。
自分自身でも高く突き上げた股間を指でくちゅくちゅと弄って愛液を垂れこぼしながら、くたくたにふやけた佐奈の小陰唇をめくっては膣前庭の粘膜部をレロレロと舐めくすぐる。愛液の分泌が少なくなると、舌先を窄めて膣の入り口を急かすように穿り、ついでとばかりに小さな尿道を突き捏ねる。
「はぁあっ！　そこ舐めちゃっ!!　――くぁあっ、ふあぁううっ！」
途端に感電したように身を暴れさせ、愛想のない少女の口が媚びた喘ぎを漏らす。
自分からも乳房を揺羽に押しつけてしまい、圧迫で潰れた乳首から悩ましい疼痛を走らせて息を詰まらせる。それでも、佐奈は祐介にされるまではと、イキそうになるのを唇を噛んでいじらしくこらえていた。
「佐奈、さん……」
揺羽と美蓮に施される淫靡な悪戯に頬を上気させ、潤んだ瞳であらぬところを睨み、絞ったような喘ぎを漏らして健気に歓喜を抑える。
快感に崩れそうになりながら、意地っ張りな性分から助けを求められずちらちらと横目で彼のほうを窺っている。祐介を暴漢から守るほどの強さを誇るというのに、素直になり

きれぬ彼女の不器用さが祐介の庇護欲を刺激し、愛おしさに胸を高鳴らせた。
「ゆ、揺羽さん、美蓮、あ、あの、佐奈さんを、その……ぼ、僕に……」
しかし押しの弱い性格が災いして、自分の気持ちを表せないのは彼も同じだった。
他のことには度胸もついてきた祐介だが、艶っぽいことに関してはまだまだ照れくさくて仕方がない。
「なあに？　祐介さまも佐奈の敏感なところ弄りたいのかしら～。そうだわ、あたしとこの娘のおっぱいの間に挟んで気持ちよくさせてあげましょうか」
しどろもどろになっていると揺羽が、甘美な絡み合いへと誘惑してくる。
「えっ……いや、あの……」
佐奈に馬乗りで身を擦り寄せながら揺羽は顔だけを振り向かせ、からかうような口振りで言う。ますます照れくさくなってしまう奥手な少年だが、
「――ゆ、ゆう……すけ、さま……ぁ……」
甘美に心を漂わせる強い目付きのメイドが、掠れる声で彼の名を呟いてしまった。
本人も無意識だったらしく、驚いて唇を閉ざし反射的に祐介の様子を確かめてしまう。
「――!!　はうっ、う、うそっ……」「あ、――さな……さん」
見つめ合ってしまい、またしても互いに気まずそうに顔を真っ赤に染める。だがすぐに照れて顔を背けてしまう佐奈が今度は違った。メイド二人から与えられる悦感に身体をビ

クンと震わせて上擦った喘ぎを溢しつつも、訴えるような眼差しを注ぎ続ける。
（――佐奈さん、僕に、なに言おうとしたんだろう？　なんか真剣な目で……。まさか……？　で、でも、僕も……っ!!）
また顔を伏せそうになってしまうが、すんでのところで思い留まる。いままでの心の行き違いは、お互いに自分の本心を隠したままで相手の考えを邪推した結果の誤解だった。
言葉として口に出せないまでも、彼女が恥ずかしいのを我慢して瞳で訴えかけてきてくれるのに、自分だけが逃げるわけにはいかない。
「揺羽さん、美蓮、ごめん、僕、佐奈さんと契りを交わしたいんだ。だから……」
おずおずと少年が口にした言葉が最後まで終わらぬうちに、いままで執拗に佐奈の敏感帯を困らせていた二人があっさりと身を引いた。ベッドの上ではあるが、彼の傍らに控えて姿勢を正し穏やかな笑みを浮かべて見詰めてくる。
「やっと二人の気持ちが繋がったみたいね。ずっとギクシャクしてたし、事件が終わってから仲直りはできたみたいだから安心はしてたんだけど、このまま佐奈は抱いてあげないのかなって、心配だったから」
「これで佐奈も祐介さまにすべて捧げたメイドとして、お仕えできるネ」
彼女を追いつめるほどに快楽を与え続けたのも、少年の本心を確かめるとともに、彼自身にもその気持ちを自覚させるためだったようだ。

「さあ、祐介さま、佐奈をあなたのメイドにしてあげてください」
精液の雫を鼻の頭にくっつけた晶も、ベッドの上に這い上がってきて少年を促す。
ようやく過剰な歓喜の波から解放されて震える吐息を整え、佐奈が縋るように見詰めている。ぐったりと淫汗にまみれて横たわるその身体へ祐介が覆い被さると、ドキドキと高鳴る胸の鼓動が伝わってきた。
（ぼ、僕だけじゃなくて、佐奈さんも、ふ、不安なんだ……）
近づくほどに愛おしさが込み上げてくる。いつしか祐介の心から気後れが失せて、見る者を和ませる屈託のない笑みが浮かんだ。
降り注ぐ笑顔に緊張をほぐされ、佐奈も表情を綻ばせかけて、慌てて引き締める。
「佐奈さん、僕と……、僕の……、ぼ、僕だけのメイドになってくれますか⁉」
不意打ちのように契りを求められ、
「あ、あなたのような頼りない当主では、わたしがついていないと危なっかしくてたまらない。だから、あ、あなたのメイドになって護衛してあげる。い、言っておくけれど、龍堂寺のためであって、ゆ、祐介さまのために契るんじゃないぞっ！」
口ではそう言いながらも、彼の手をしっかりと握ってくる指が命に代えても少年を守るという決意に満ちていた。
「佐奈……」

「えっ……？　ふっ、ふぁあぁあんっ！」
首筋に顔を埋めるようにして呼び捨てに彼女の名を囁く。親しく名を呼ばれた嬉しさに声を上擦らせ、少女がむしゃぶりついてくる。彼の細い腰を太腿で挟み込み、緩やかに開かれた佐奈の股間へと、いきり立った祐介の怒張が押し当てられた。
もう二人とも期待液を垂れこぼしすぎて、べちょべちょに濡れヌメっている。過剰な潤滑を纏ったその肉太が陰唇花弁を掻き乱しながら粘膜箇所を擦り上げ、狭く開いた膣穴を探り当てる。
ぬじゅっ、めちゅぷっ！
濁汁の多さに淫靡な音色が大袈裟に響いてしまう。触れあわせただけで陰部に雷撃が走り、息が止まってしまうが祐介は佐奈の膣穴に怒張を挿し込んでゆく。
ぶずぶっ！　にゅずぅううっ!!　ずじゅぶっ、ぐずずぶっ！　ずぶずぶずぶっ!!
「はぁあぅ……、こ、これぇ、ふぅ、太すぎぃ。んっ、はうぅ、きゅぁあぁ……」
見た目以上の極太に穴壁を押し広げられ、嬌声が切羽詰まる。護衛メイドの膣襞は待ちに待った歓喜に、キュンキュンと連続して怒張を何度も締めつける。
（くうっ！　佐奈さんの、物凄く締めつけてっ、ああっ!!）
肉太を芯まで圧縮される甘美がもっと味わいたくて、もっと奥へ押し込もうと腰が迫り出す。

――ヌズッッ！　ぶずじゅっ!!　ぶっずんっッ！

「あ、あ、あぁ、あふぁあぁ！　そんなぁ……もうっ！　んふぅ――ッ!!」

性急に突き込んだ怒張の鉾先が子宮壺に容赦なく激突し、佐奈は理性が弾けた悦叫を張り上げた。

「ふぁ～、佐奈、凄く気持ちよさそうネ……」

歓喜に歪んだ淫らな表情を間近で見せつけられ、猫耳少女が羨ましそうに指をくわえる。

「挿入だけで、軽く絶頂してしまったのですね？　佐奈ったら……」

「相変わらず感じやすい娘ね～。でも、祐介さまの太～いの入れられたんじゃ仕方ないか～。はぁん、なんだか、あたしも欲しくなってきちゃった～」

いつもならばムキになって言い返すだろう、同僚たちのからかいにも言葉を発することすら叶わず、ツインテールがほつれかけた娘は、無我夢中で祐介の首筋にしがみつくとカクカクと全身を痙攣させる。

豊熟な乳球が彼の薄い胸板に挟まれて拉げ、熱く柔らかな密着感を与えてくる。押し潰されはみ出た横乳を興味深げに指先でさすってみると、つきたての餅のように粘りを持った弾力で絡みついてくる。

「ふぁああっ、やあっ！　らめぇえっ、そっ、そこおっ!!　はっ、わぁあぁあぁんっ！」

それだけのささやかなこそばゆい快感にも、鋭敏さを増した佐奈の感覚は過剰に反応し、

甘えるような声を揺らして、彼の首に絡めた腕を熱烈にする。
その縋りつくような抱擁を受ける少年の剛直へと、かち上げられた奥壺からお返しとばかりに煮えたぎった熱汁が浴びせられる。
――ちゅびゅううっ！　ぶじゅっ、びちゅうっ!!
竿と襞の密着した隙間から収まりきらぬ雫を溢れさせ、鼠蹊部(そけいぶ)までもしとどに濡らす。
（さ、佐奈さんの膣内ぁっ、こ、こんなに、熱くなっちゃってるっ！）
挿れただけでまだなにもしていないというのに、ぎゅうぎゅうと締めつけてくる穴襞が愛液同様に熱を持って祐介の肉太を焙ってくる。クールな顔立ちからは思いも寄らぬ情熱的な牝穴の歓待に、少年の心が弾んだ。
彼女の悦頂の波も収まりきらぬ状態で、祐介は喜びに打ち震え、無我夢中のストロークを繰り出し始めた。
「――はわぁっ、あぁ、あ、あああわあぁっ！　そん、なっ、膣内ぁっ、祐介さまっ、の……こ、擦れっ、ああっ、ぁあああっ!!　イイッ！　イイのっ！」
入れられた感触だけでも喜悦が弾けてしまっていた佐奈は、膣内で動き回る男根の味わいにあられもなく乱れて歓喜を迸らせた。甘美が収まらずキュンキュンと緊縮し続ける狭穴を豪快に押し広げ奥まで届いたかと思うと、膣口ギリギリまで抜け出て、もどかしい疼きをもたらし、欲求を滾らせた牝性欲を意地悪く焦らす。

（ああ、佐奈さんが僕ので、喜んでる！　う、嘘みたいだっ!!）

経験が浅く工夫に欠ける抽送であったが、速いテンポの勢いがよい突き込みは、素直な態度を示せない照れ屋な少女を狂わせるにはむしろ効果的であった。

――ぶずっ！　じゅばぶっ!!　ぐっちゅ、ずぶじゅっ！　びじゅじゅっ!!　すじゅっ！

太い肉竿の先で大きく広がった雁傘が大胆に壁襞を刮げ、子宮を乱暴に突き上げるたび、佐奈の穴奥からは悦び汁が溢れ返り、小気味よいストロークの音を悩ましく飾る。

「ひあぁっ！　もうっ!!　こ、こんなっ……ぁあっ！　だめっ、キツいのすごいいいっ!!　ゆうすけさまのぉ、お、奥っ、奥ぅうううっ！　ああ、お腹弾けちゃうっ!!」

「……佐奈、すごい……。き、気持ちよさそうネ……」

「なんだか、私まで、う、疼いてしまいますね……」

「あ、あんなに、エッチな汁、あそこから溢れさせて……。ふぁあ、祐介さまの太いの、ズボズボ出たり入ったり、たまらないわ～」

彼女の激しい乱れように、傍らで見守る少女たちまで情欲を煽られ、落ち着きなく腰をもぞもぞとさせる。一番積極的な揺羽が我慢しきれなくなり、一心不乱に腰を繰り出す主へと肉感的な身体をしなだれかからせた。

「祐介さまぁ、佐奈ばかり可愛がっていないで、あたしの相手もしてくださいな。ほら、もう、お乳がこんなに張っちゃって……。切なくて、たまらないのぉ……」

両手に収まりきらない巨乳をたぷたぷと揺らして主へと差し出し、興奮に硬勃ちした紅色の乳首を見せつけた。その様を見て、負けじと美蓮も甘えてみせる。
「ふぁああ、佐奈のに深く挿入ってるの見て、美蓮も、入れられたの思い返しちゃったヨ。そしたら、膣の中、熱くなって変になっちゃったネ……。美蓮、頭、飛んじゃいそう……」
自分からチャイナドレスの裾を捲って発情した牝猫のポーズで尻を突き上げ、あられもなく陰部を彼へと見せつける。小振りの尻の狭間に開花した淫靡な秘割は開きっぱなしの膣から止めどなく愛液を垂れ流し、内腿に滴り落ちて液筋を描く。
「ゆ、ゆらは、さん……。めいりゃん、も……？」
両側から差し出された誘惑的な女肉の、果実酒に似た発情臭に惹かれて、佐奈のヴァギナを貪っていた少年がうっとりとした眼差しを注ぐ。牝穴を満たす極太の悦びに乱れよがる少女の抱擁を優しく解くと、ストロークの激しさは損なわぬまま上体を起こし、快楽を強請るメイドたちへと両手を差し伸べる。
しなだれかかるように顔の間近まですり寄ってきた揺羽の爆房を右手で受け止め、少し力を込めただけで指がずぶずぶと埋まってしまう柔肉を大胆に揉み捏ねた。
そして房の大きさからは奇跡のように小さく色も鮮やかな紅色の乳輪へと唇を這わせると、赤子のようにちゅうちゅうと吸い上げ、舌先で乳首を荒々しく転がした。
「くふぅあっ！　んんぅうっ!!　ふぁあ、コレぇイイ～～～～んっ！　んはぁ!!　すご

いっ、すっ、そんな吸っちゃうなんてぇっ！　あ、ああ、祐介さま、それぇ、お乳出ちゃうっ!!　あたしのお乳で祐介さま、育てちゃうのぉ〜っ！」

感度が過剰となった乳粒を乱暴にされる悦乱に理性が消散した。ふくよかな膨らみに顔を埋め、右手で執拗に捏ね遊びながら貪るように吸い上げられ、倒錯した母性愛を少年に注いでしまう。実際に母乳など出るわけがないが、彼の口中へ熱いミルク飛沫を噴射する錯覚に、祐介の頭部を抱きしめて嬌声を張り上げる。

（揺羽さんの、おっぱい、や、柔らかくて……あふっ、なんだか、汗なのに、甘い味して、お乳飲まされてるみたい……）

少年のほうも包容力に溢れた乳房に悩殺され、すっかりその気になっていた。その一方で、揺羽とは対照的に庇護欲を掻き立てられる幼げな少女の陰部を、もう片方の手でまさぐる。

触れた瞬間に熱いぬめりの汁で手がべっとりと濡れる。細かく蠢き誘ってくる膣穴に、指を差し込もうとして、祐介は彼女が後ろの穴を穿られて喜んでいたことを思いだした。

（や、やっぱり、お尻のほうが、いいの……かな？）

そんなことにまで気を使ってしまう彼らしい戸惑いに、淫裂へと指をめり込ませたまま動きが止まった。過敏な部分に焦らすような刺激をもたらされ、中華少女が腰をくねらせる。急かされたと思い、祐介は膣穴には人差し指と中指を揃えて二本同時に挿入し、菊皺

を押し広げたアナルに、親指を根本までぬずぶぶっ！　と潜り込ませた。
「ひゃわぁあああぁっ！　あふうっ!!　あああっ、両方っ!!　両方きちゃったぁああっ！　んぃいいいっ!!　お尻も、おま○こも、美蓮たまらないよおおっっ！　はひっ、はひぃい、ひはひぃいいいいいぃっ!!　ああうっ、お尻、出そうなの、気持ちイイィイッ！」
ヴァギナは勿論のことアナルも歓喜にゆるゆると弛緩して、三本の指はさしたる抵抗もなくそれぞれにするりと、埋まり込んでしまった。だがその途端、穴奥へと走り抜ける快感に、前後の襞壁が強烈な収縮で締めつけてくる。
（くぁああっ！　め、美蓮の、こんな、すごく強いっ!!　指がぁ、どんどん奥にくわえ込まれちゃうっ！）
指先に弾力的な子宮口が触れた。激しい締めつけに興奮を昂ぶらせ、抗うようにぐちゅぐちゃと潤み壁を掻き乱し、前後の穴を隔てる体内の肉壁を摘んで捩る。
「ひゅぐっふううっ！　ひゃっ、やぁああっ!!　そん、な、所ぉおっ！　股の中ぁ、ギュンって締まっちゃうよおおっ!!」
その激烈な快悦感に悲鳴のような声を張り上げながらも、美蓮は愛液と腸汁の飛沫を散らす可憐尻をますます祐介へと押しつけてくる。
「祐介さまと佐奈の大切な契りの交わりだというのに……。ふ、二人とも邪魔をして……」
そう言いつつ晶も、控えめながら少年の背に胸の膨らみを擦り寄せて、熱い吐息を首筋

へと吹きかけてくる。こういうときにいつも一歩引いて遠慮してしまう性格を自嘲するように苦笑を浮かべつつ、桃形の美尻をぴっちりと浮かび上がらせたズボンの上から指を忍ばせて、陰部を自分で弄り慰めた。

「んっ……んうっ！　あ……はぁああっ!!　ゆうすけ、さまぁ……！」

見る見るうちに股間の黒い布地にじゅくじゅくとした染みが広がって、指の蠢きに湿った衣擦れの音を立て始めた。

（あ、晶さんまで……!?　すごく息が、熱くなってるっ!!）

四人もの美少女メイドたちが、自分などに欲情して身をくねらせている。数日前までは考えも及ばなかった狂おしい状況に、祐介の興奮が加熱された。

彼が上体を起こしたため抱擁を解かれた佐奈が、安息感を取り戻そうと手を伸ばしてくる。揺羽と美蓮の敏感部から手を離し、彼女たちが物足りなそうな喘ぎを上げる中、武術メイドの引き締まった肢体を、挿入したままで膝の上に抱え上げた。

「ふううぁあっ！　ああっ!!　当たるううっ！　奥がっ、ギュッ、ギュッってして、ふぁああっ、い、イイのおッ!!」

密着度が高まってより深くまで埋まり込んだ怒張に、蜜壺の圧迫が強まって武道メイドが歓喜に乱れた。晶が吐息を吹きかけていた首筋に腕を絡ませて、自ら腰をグラインドさせてくる。

「あわぁっ！　さ、佐奈さんっ!!　そんなに、したらあっ！」

ぐじゅぐじゅと濃蜜を糸引かせて捏ね混ぜる刺激に誘われ、少年のストロークも激化した。佐奈の細いウェストを強く抱きしめ、下から無我夢中で腰を跳ねさせて勢いよく穴奥を突き上げる。

「ふぁはっ！　祐介さまっ？」「きゃはんっ！　いやぁっ!!」「あう、だめネ……」

激しさを増す彼の動きに弾かれて、恨めしそうな声を漏らしながら少女たちが崩れ伏す。そのようにも気づかず祐介と佐奈は恥骨同士をぶつかり合わせて、穴筒から噴き出す蜜飛沫で下半身をべちょべちょに汚し続けた。

「はぁわぁああっ！　ゆ、祐介さまのっ、太いの来ちゃうっ!!　あぁ〜〜っ、奥過ぎぃっ！　こんな、イイの、だ、ダメぇ――――ッ!!」

彼女の身体を迫り上げて一気に落とし、迎え撃つように突き上げる抉り込みに、佐奈は背中を大きく仰け反って快楽にわなないた。頭の両脇で結わえたツインテールを揺らし、喜悦に顰めた顔を振りたくると、胸ではち切れそうに熟れ実った巨房乳までもがぼわん、ぼわん、とゴムまりのように弾んで全身から染み出た官能汗を振りまく。

それでも少年の視線に気づくと途端に恥じらいを表情に浮かべ、上気した顔で嬌声を抑えようとするのだが、子宮への乱打にその都度締めつけを返してくる膣襞が、ぎゅるんと波打って極太の怒張肉を激震させた。

ヌメヌメの襞が亀頭の裏から根本へと、絞るように強く絡みついてくる。
ギュッと力強くしがみついてくる強い抱擁に息を詰まらせながらも、ゴムまりのように柔軟な筋肉を備えた女体のしなやかな感触に祐介は安堵感を覚えた。
絶妙の抵抗感に痺れを感じながら、限界を超えた勢いの抽送で怒張が牝穴を抉り突く。
「だめっ！　そん、な……ああっ!!　佐奈さんの膣内ぁ、気持ちよすぎるっ！　で、でちゃうっ、ごめんなさいっ!!」
「ば、ばかあっ!!　御主人様が、メイドになんか、謝るなああっ！　――ひぁああうっ!!もうっ！　そんな、ふ、太いので、奥をッ、くぅううう……。――出していいのっ!!」
腰に迫り上がる熱濁の予感に我慢が間に合いそうになく、詫びてしまう主だが極太に悩乱しつつも厳しくメイドが窘めた。
しかし悦情で緩んだ顔を赤らめるその表情は、ヴァギナを褒められた恥ずかしい喜びを誤魔化すように済まして素っ気なさを装い、視線を落ち着きなく漂わせて眉根を寄せる。
「ご主人さまだから、メイドに出して、いいのおぉっ！　あぁはああっ!!　イクッ！　わたしも、イッちゃうっ!!　ご主人さまにっ、祐介さまに、イかされちゃうぅうううっ！」
だがその素直でない態度もほんの束の間、すぐに甘えるように目元を乱れさせ、勢い任せに素面では言えない言葉を張り上げて、彼の華奢な身体の感触を貪るように肌を擦り寄せてくる。そんなどうしようもなく不器用な様子が、祐介の琴線を震わせた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/